

さらっと読めるSS集 (2)



# リレー

---

## リレー

「話を聞いてくれないか」

俺がその男にそう声を掛けられたのは二週間前の事だ。定職につかず毎日ふらふらしていた俺は、その日も大都会まで出向き、狭い喫煙所に群がる人々の中で煙草を吹かせていた。今日はどの店から回ろうか、そんな事を考えながら煙をゆっくりと吐き出したとき、灰色のコートを纏った中年の男が「ライターを貸してくれないか」と声を掛けてきたことが始まりだ。その男には見覚えがあった。というよりは、言葉を交わしていないだけで、ほぼ毎日お互いの存在を認識していた。昼前の午前十一時、俺達はこの喫煙所に来る事が日課だったのだ。俺が男にライターを渡してやると、男は何も言わず頭を下げ、口元に火を持って行き煙草に火をつけ、一度大きく吸いこんだ。男はゆっくり噛みしめるように煙を楽しんだ後、曇天の空に向かって吐き出す。そしてライターを俺に返すのと一緒にこう言ったのだ。「話を聞いてくれないか」と。

## リレー

---

始めはうさんくさい奴だなと思ったが、日々遊んで暮らしているような俺は、この地では既に遊び尽くして退屈を感じていた所だった。俺は男の話を聞いている内に興味を示し、男の話を受け入れることにした。こうして俺の運送業は始まったのだ。

やることは簡単だ。この場所で男から小包を受け取り、それを所定の場所に持って行き他の人間に託す。決められたルールは、時間と場所は絶対に間違えるな。他人に話すな、話さなければ見られるのはかまわない。自然に話しかけて、渡せ。そして、中身は絶対に見るな、というもので危険な臭いがしたが、それでも俺はその仕事を楽しんでた。先日の受取人はいいやつで、一緒に飯を食いに行った。年齢は俺と同じくらいで、端から見れば俺達は友人にしか見えなかっただろう。この程度の付き合いなら依頼人の男も許すと言っており、こうして人と出会うのも悪くないと思った。今日の届け先はここからは割と近い、大都市のターミナル駅だ。そこの駅ビルの三階、飲食店通りの男子トイレで相手は待っているらしい。

## リレー

---

俺は駅につくと、一度駅ビルを抜け喫煙所へ向かった。俺と依頼人の出会った駅の喫煙所と比べれば大分人は少なく綺麗な感じはしたが、それでも自分のすむ街と比べたら人の量は多く、ここで俺が消えても誰も気がつかないのでは無いかと思った。俺はしわくちゃになった煙草を取り出し、安物のライターで火をつける。煙を吐き出して時計を見ると、待ち合わせの時間までは後七分だった。早くても遅れても良くない、煙草を吸いきればちょうどいい時間だった。

煙草を吸いきった俺は、バッグの中に荷物が入っていることを再度確認して、喫煙所を発った。その足で一直線に駅ビルの中に入り、エスカレーターで一つ上の階へ上り、そこから階段を使って二階を目指した。時刻は昼時だ。飲食街は働いている人間や学生が多く歩きづらく、こんなに人がいて大丈夫なのかと俺は心配になったが、依頼人の事を多少信頼していた俺はその心配を払拭し、ついにその場所、二階の男子トイレに着いた。

## リレー

---

俺は男子トイレに入り、後ろに誰も居ないことを確認し、トイレの個室の鍵が閉まっているのを確認すると、依頼人の指示通りバッグの中身を個室の中に投げ入れた。これで今日の仕事も終わりだ。今回は相手の顔を見ることは出来なかったが、たまにはこういう日もあるだろう。今日は男に前払いで報酬を貰ったため、このまま買い物にでもいこうかと思いついて用を足そうとしたとき、不意に個室のドアが開き、俺は背後から、刺された。俺は余りの痛みに出かかった小便を止めることもできず、床にまき散らしながらもがいた、が俺を刺した男は執拗に俺を攻撃し、俺の意識はそこで飛んだ。

自分を殺すための凶器を運んできた青年が事切れたのを確認し、小柄なその男は青年のポケットまさぐり、その中から茶封筒を取りだし中身を数える。依頼人の言う通りの額が入っているのを確認した男は、どうやら青年は割と謙虚な人間らしいと男は思い、「これで遊んでくれや」と言い青年の死体の上に一万円札を放り、足早に男子トイレを出た。

青年が殺されてから数週間後、度重なる万引き、夜歩き、喫煙などで親から勘当された少女が、灰色のコートを着た男の横で煙草に火をつけた。男は少女の顔を見てニヤリと笑い、少女に声をかけた。「ライターを貸してくれないか」と。

# パズル

---

## パズル

彼はその日、十四歳の誕生日を迎え、父からプレゼントにパズルを貰った。切り取られたピースを一つ一つつなぎ合わせる。まずは一番外側のピースから次々に形が出来上がり、外枠がはっきりしていく。これだけでは何が描かれているのかは分からず、かろうじてわかるのは背景の色使いくらいだ。暗い色が基調。きっと夜景か何かの絵なのだろうと彼は思いながら次々とピースをはめ込んでいく。徐々に絵がはっきりしていくに連れ、彼の心に不安が募っていった。黒い背景が夜なのは正しかったが、何かが燃えている様子や人々が苦しんでいる様子が描かれているようだったからだ。それでも、父のくれたものだからと彼は手を動かし、実体をはっきりさせていく。そして、彼が最初のピースをはめ込んでから二時間後、ついにその絵は完成した。彼が一つ一つ地道にピースを繋げて完成したそのパズルが映し出したのは、戦争の絵だった。完成して意味が分かった時、彼の顔にようやく笑顔が生まれた。

# 交換日記

---

## 交換日記

「今日は学校でこんな事があったよ！授業中、先生がチョークを折っちゃって、新しいチョークに替えたら、それもすぐ折れちゃったんだ。教室中が笑いに包まれたよ」

「へえ、それは面白いね。僕は今日も教室の隅で本を読んでいたよ。君に勧めたい本があるのだけれど読んでくれるかな？」

「あまり本は読まないけれど、お前のお勧めなら読んでみようかな」

「ありがとう、じゃあ今度君の机の上に置いておくよ」

「今日、先生に怒られちゃった。授業中に別のノート出してるのが見つっちゃってさ、実は言うところの交換日記なんだけれどね。少し恥ずかしかったよ」

「君はうっかりしているなあ。そんなんじゃ次の試験上手くないぞ？」

「大丈夫だよ、ちゃんと塾に通って勉強しているし、塾での成績もいいんだぜ」

「それならいいのだけれど、もう見つからないようにしなよ？」

「忠告、ありがたく受け取るよ。君の方は試験勉強進んでるの？」

「僕の方は大丈夫だよ。君と違って遊ぶ友達もないし、本を読むか、勉強するかしかする事がないからね」

「勤勉だな。でも、それじゃあ学校に行っても面白くないだろう」

自宅の勉強机に座っていた俺はノートを閉じ、大きく息をついた。そうだ。学校に行っても面白くはない。授業中に日記が見つかったとき、先生は耳元で小さく注意するだけで、注目を浴びることは無かった。きっと先生が俺に気を遣ってくれたのだろう、俺はいつも一人ぼっちな人間だから、俺が目立ちたくないのを知っているから。先生がチョークを折ったとき、俺はクラスメイトが笑っている中、一人下を向いて本を読んでいた。でも、やっぱりそれじゃあ駄目なんだ。これじゃあいつまで経っても学校が面白いと感じることは出来ない。明日は前の席のヤツに挨拶してみようか。俺は彼から受け取った本を本棚に戻し、日記を閉じてごみ箱に放りこんだ。

## 二人の思い出は忘れられる事なく

---

二人の思い出は忘れられる事なく

彼が小学校に入学して、初めての夏休みが訪れた。まだ自転車に乗ることが出来ない彼の遊び場はもっぱら近所の公園だ。ブランコに乗って、滑り台に上って、砂場で山を作って、毎日同じような遊びしかしなかったが、幼い彼にとってはそれでも充分過ぎるほどに楽しく、来る日も来る日も服を泥だらけにして家に帰り、母に叱られる。そんな毎日だった。

彼の夏休みが少し変わったのは、八月に入ってからだ。公園に行くと、自分と同じくらいの年の女の子が公園の隅に立つ木の下で必死に飛び跳ねているのを見つけた。彼はその子に駆け寄り「どうしたの？」と声を掛けた。女の子は今にも泣き出してしまいそうな顔で彼に「取れないの」とだけ言った。彼が上を見上げてみると、フリスビーだろうか、円盤のようなものが枝に引っかかっているのが確認できた。

「僕が取ってあげるよ！」

「ほんとに？本当に取れるの？」

「うん、まかせて！」

いまいち自分を信じてくれない女の子を背に、少年は木をよじ登っていく。そこまで背が高い木ではないため、彼はみるみるうちに上の方へ上がっていき、それを見て女の子は「わあ……」と嘆息した。彼は引っかかった円盤、やはりフリスビーだ、をブンブンと大きく振り「取れたよ！」と言い、上ったときよりも更に早い時間で木を降りた。

「はい、これ」

「あ、ありがとう」

女の子は彼から緑色のフリスビーを受け取り、お礼を言った。

「今日は一人で遊んでるの？」

少年は女の子に渡したフリスビーが気に入りそう言った。二人で遊ぶものなのに、女の子は一人だったからだ。

「うん、ひとり」

「じゃあ一緒に遊ぼうよ！」

悲しそうな表情だった女の子の顔がぱあっと明るくなった。女の子もまた、彼と同じようにずっと一人で遊んでいたのだ。少年は女の子からフリスビーを取り上げ、女の子から離れていく。彼が女の子を目掛けてフリスビーを放り、それを女の子が上手くキャッチした時、二人は友達になった。



## 二人の思い出は忘れられる事なく

---

二人は友達になってから、毎日二人で遊ぶようになっていた。気がつけばお盆が過ぎ、夏休みの登校日が来ていた。登校日と言っても、学校に行って宿題を提出したり、夏休みを過ごす上の注意があったりするだけで、学校自体はすぐに終わる。彼は今日も公園に行って女の子と遊ぶことを考えながら教頭先生の話聞いていた。教頭先生は、夏休みの事故について特に力を入れて語っていた。夏休みは楽しくて、どうしても気が緩みがちになり事故が増えるから、普段以上に気を付けるようにと。そしてその後教頭先生の口から出た言葉に、彼は驚いた。

「ふたご公園の前で、実際に交通事故が起っています」

## 二人の思い出は忘れられる事なく

---

彼は学校が終わると直ぐに公園に向かった。嫌な予感がしたのだ。彼は教頭先生の言う通り、車に気を付けながらも公園を目指した。彼は息が上がりがながらも公園へとたどり着き、女の子を探し始めた。小さな公園だ。彼は一通り公園を見渡して、彼女の姿が見えない事を確認すると、今度は公園の周りをぐるっと一周回ることにした。教頭先生は誰かが亡くなったとは言っていなかった、それでも彼は安心したかった。彼は外側を一周し、安堵して公園のブランコに腰をかけた。花が供えられている様子は無かった。女の子に何かがあったわけじゃない。彼はそれが分かると、勢いよく立ち上がりブランコを蹴り上げた。最初はゆっくりとこぎ出し、徐々に振り幅を大きくしていく。まだ暑い夏の昼をブランコが風を切って揺れた。軽く汗を吸って湿ったシャツが風を受けてひんやりと気持ち良かった。彼は涼を取るために、何度も足を動かしブランコを揺すった。彼がそれを繰り返していたとき、築山のトンネルの入り口に何やら人影が動いているのを発見した。彼はもしやと思いブランコを飛び降り築山へと駆け寄り、トンネルの中を覗いた。友達がいた。いつもと同じように、鞆に遊び道具を詰めた女の子がいた。彼にとって、今日ほど女の子と会うのが嬉しい日はなかった。彼の不安は完全に吹き飛び、不安を感じていたことを一瞬で忘れてしまうくらいだ。

「今日は何して遊ぼっか？」

「フリスビーがいい！」

彼の問いに対し、女の子は笑顔でそう答え、フリスビーを手に持ちぱたぱたと彼から離れていった。初めて会った日と違い、彼女から嬉しそうにフリスビーを投げるのを見て、少年は今まで以上に女の子と遊ぶのが楽しくなっていた。

## 二人の思い出は忘れられる事なく

---

次の日も少年がいつもの公園に行くと、昨日は目につかなかったものがあることに気がついた。公園の横の電柱の陰にひっそりと供えられた一輪の花。彼にはその花がなんという種類の花かは分からなかったが、誰かが亡くなったという事は理解できた。しかし、昨日もいつも通り女の子と遊ぶことが出来た少年にとって、その花瓶はもはや興味の対象ではなく、風景の一部だった。彼は今日も女の子と遊ぶのだから。今日はどこにいるのだろう、まずは、かくれんぼから

。



少年が、少女を探そうと花が供えられた電柱を勢いよく回った時、静かな住宅街に激しいブレイキング音が響き渡った。

俺の住んでいる街には、こんな噂話が伝わっている。ふたご公園には、遊び相手を求める女の子の霊がいて、仲良くなると永遠に遊び相手をしなければならないと言う話だ。俺にこの話をしてくれたのは母親だから、かなり昔から伝わっている話なのだろう。この街の人間なら殆どが知っている、いわゆる都市伝説というやつだ。たぶん、暗くなってきたら早く帰ってきなさい、とか一人で遊ぶのは危ないから止めなさい、とか教育の面が強いのだと思う。俺も小さい頃この話を母から聞いてなんだか怖くなり、カラスが鳴く頃には家に帰ったのだから。公園の前には、今でも二本の花瓶が置かれ、誰が替えているのかは分からないが、毎日新しい花が供えられている。まだ死を悼む人があるのだ。さっと仲が良かったことも運なのだろう。二人の死がこのようにして後世に伝わるのは、なんだか、ひどく、悲しい気がした。だって俺がこどもの頃この公園で出会った女の子は、俺を連れ去るようなことはしなかったのだから。一緒にいた男の子は、俺に話しかけてくれなかったけれど。

# 雪解け

## 雪解け

起床した彼がカーテンを開けると、白い雪が積もっていた。雪は朝の太陽を反射して光り眩しい。いくら晴れているとはいえ、一日じゃ溶けないだろうと彼は思った。彼はカーテンから手を離し、携帯電話を手に取った。着信がある。彼には大方誰がかけてきているのかは分かっていた。しかし、自分から電話をかけ直す勇気がなく、携帯電話を手にしたままベッドに大の字になり、天井を見上げた。

友人との喧嘩が始まったのは、些細な事からだった。俺が大事にしていたCDを友人に貸したのが事の始まり。そのCDはもうどこにも売っていない、廃盤となったものだった。ファンの中では希少価値が高く人気があるもので、ネットオークションなんかでは発売当初の五倍の値で売られているようなものである。それを友人が気に入り、貸したところ、見事にパッケージにヒビが入った状態で返ってきてしまったのだ。友人はそれを知ってて誤ってきたが、俺は激昂し、友人に暴言を吐いてしまった。それ以来、友人と会うのが気まづくなってしまった。毎日のように電話がかかって来るが、どう話していいかわからず、毎回出ることが出来ない。俺より友人の方がよっぽど電話するのに勇気が必要だと言うのに。最近の悩みは専らこのことである。

彼は地元から遠い大学に通っており、現在は大学の近くのアパートで一人暮らしをしている。今日の授業中は昼過ぎからのため、彼が早起きしても特にすることはなく、ぼーっとしていたところ、玄関のチャイムが鳴った。きっと大学の奴らが暇つぶしに来たんだろう、そう思って彼は玄関まで気怠そうに向かい、ドアを開いた。

「あっ……」

彼の前には喧嘩している友人が立っていた。

「電話くらいでくれよ」

「ごめん」

「俺だって申し訳なく思ってる。やっぱり悪いのは俺だからちゃんと謝りたくてさ」

「いや、もういいんだよ。俺も言い過ぎた」

「ありがとう、ごめんな」

友人はごめんといいながら、ビニール袋を差し出してきた。その袋は俺がCDを貸した時のものだった。そう言えば貸したCDを返してもらったときに、怒りのせいで受け取るのを忘れてしまっていたことを俺は思い出した。

「中、見てみてよ」

友人の言うとおりに中を見てみると、俺が貸したCDが綺麗になって入っていた。

「これ、どうしたんだよ!？」

割れたパッケージではない。明らかに買い直したものだだろう。でも!

「これ高かったろ!ここまでしなくても良かったのに……」

「いや、あのCD気に入っちゃってさ。お前があそこまで怒るのも分かったんだよ。で、自分の分が欲しくなっちゃって」

「それでも!言ってくれば、俺のあげたのに……」

「それじゃあ意味ないからさ」

友人は俺の顔を見てぎこちなく笑うと

「こんな形になっちゃたけれど、誕生日おめでとう」

鼻をかきながらそう言った。そう言えば、今日は俺の誕生日だったんだ。こいつに言われるまで気がつかなかった。

「ありがとう」

「外で待ってるから、学校行こうぜ、一緒にさ」

「……おう!」

俺は友人の言葉を聞いて、大急ぎで部屋に戻り着替えをした。横目でカーテンの外を見ると、心なしか、雪が少し溶けているような気がした。